

かつ かわ しゅん しょう にしき おり
 勝川春章画『錦百人一首あづま織』



『錦百人一首あづま織』（安永4年刊）

カラーでお見せできないのがいかにも残念ですが、この本は、目にも鮮やかな極彩色の歌仙絵（歌人の肖像画）を伴った版本です。江戸時代中期の安永四年（一七七五）に、江戸の書肆雁金屋清吉と雁金屋義助によって刊行されました（初版の版元は植村藤三郎と雁金屋義助）。江戸の書家猿山周之による骨太かつ奔放にしたためられた和歌と、情感溢れる躍動的な歌仙絵とが絶妙の雰囲気醸し出しており、百人一首絵本の中でも極上の優品として知られているものです。絵師は浮世絵師として名高い、かの勝川春章（一七二六—一七九二）。浮世絵や春本春画が著名ですが、こうして版本にも多くの挿絵を遺しました。

これらを総称して「絵本」（画本とも）と言います。この語は、『はらぺこあおむし』（エリック・カール著）とか『くれよんのくろくん』（なかやみわ著）などのような、私たちが日頃使っている児童を対象とした絵本とは別概念のものであり、文学史の専門用語としては、「絵を主体とした通俗向けの娯楽的・教養的・実用的な版本全般を表現する言葉」として用いられます（岩波書店刊『日本古典籍書誌学辞典』『絵本』湯浅淑子執筆）。絵本の代表的作品には、喜多川歌麿画『画本虫撰』『百千鳥』などの狂歌絵本や、勝川春章画『役者夏の富士』などの役者絵本がありますが、本書のような、和歌を中心とした雅文学の領域にまたがる絵本類（今わたくしに「和歌絵本」なる呼称を付与します）もまた、雅趣があって味わい深いと言えましょう。

本書最大の魅力である歌仙絵は、それ以前に刊行されてきた種々の歌仙絵とは明確に一線を画すものであり、特に女流歌人の立ち姿は官能的ですらあります。本書は遠く明治に至るまで長きにわたって好評を博し、種々の版が刊行されました。色彩のない墨摺版や（国文研ほか蔵）、歌仙絵はそのままに和歌本文を勝川春章自身がしたためたものも存在します（跡見学園女子大学図書館ほか蔵。これこそが原刊初印本）。同版であっても色調を著しく異にするものもあり、諸本を「くらべて考える」のも実に楽しみなことです。